

第7回

「過活動ぼうこう(おしっこが我慢できない困ったぼうこう)」について(2015年6月)

最近、「過活動ぼうこう」という言葉を耳にされることが多いかと思います。過活動ぼうこうは2002年の国際禁制学会で定義された疾患概念で、その診断の基準は「尿意切迫感」が必須で、通常、頻尿と夜間頻尿を伴い、切迫性尿失禁はあってもなくても良いとされています。ただし、炎症や癌や結石が原因でこのような症状が起こる場合もあり、そのような場合は過活動ぼうこうとは言いません。すなわち過活動ぼうこうとは、多くは加齢によりぼうこうの尿を貯める機能が低下して、おしっこが漏れそうになったり、頻尿になったり、我慢できずに漏れたりする病気なのです。「尿意切迫感」はわかりにくい言葉ですが「突然起こる我慢できないような強い尿意」と説明されています。これは病的な尿意とされていますが通常の強い尿意との違いを区別するのは困難です。

以前、この病気は「不安定ぼうこう」と呼ばれていました。当時は、現在ほど注目されておらず、また治療薬も限られていましたし、受診される患者さんの数も多くはなかったと記憶しています。しかし、現在、この過活動ぼうこうで泌尿器科を受診される方は非常に多くなっています。

一般に、過活動ぼうこうは、男女でその原因や治療法が異なります。男性の場合、前立腺肥大症が原因で過活動ぼうこうになることが多く、前立腺肥大症の治療を行うことで過活動ぼうこうの症状が良くなる場合と、前立腺肥大症の治療と過活動ぼうこうの治療を両方行わなければならない場合があります。

男性の場合も女性の場合も、通常、加齢と共に排尿筋(ぼうこうの筋肉)の有効な収縮力が低下することが多いので、高齢者の過活動ぼうこうの治療には注意が必要です。と言いますのも、現在広く使われている過活動ぼうこうの治療薬である抗コリン剤を服用すると排尿筋の収縮力が落ちて、排尿後に尿が完全に出きらずに、ぼうこうに残尿として残る量が増える場合があります。これがひどくなると、ぼうこうに貯まった尿が一滴も出なくなり、おしっこはしたいのですが出ないと言う苦しい状態(尿閉と言います)になります。

一方、過活動ぼうこうの中には、抗コリン剤といったお薬が効きにくい難治性過活動ぼうこうもあり、そのような方には、詳細なぼうこう機能検査を行い、治療方針を決めることが大切です。

(川嶋)

